

# 文の意味論が成立するためのいくつかの前提について

土屋俊(千葉大学)

というタイトルをつけた以上は、

1. 文の意味論が成立するための条件は満たされていない
2. したがって、文の意味論は成立しない
3. したがって、文の意味論というプロジェクトは(たんなるゲームとして以上の意味では)的外れである
4. 的外れでない言語への探求は、「文の意味論」という形をとってはいけない
5. (若干の飛躍を必要とするが)言語の探求は言語というものの可能性の探求でなければならない。
6. そう言う以上は、(若干の飛躍を必要とするが)言語の必要性がその可能性を保証すること、それゆえ言語哲学の目的はよいアプリケーションを作ることではない

### 1. 文中心主義

- 「語は文の脈絡においてのみ意味をもつ」
- 「文の意味は真理条件である」
- 「真理の理論は意味の理論を提供する」

### 2. 自律的意味論

- 文は使用の脈絡と独立に意味をもつ(anonymous letter argument)
- 文の意味は、それを構成する語の意味をその文の構成方法にしたがって合成したものである(「合成性原理」)(前提として「語の意味は決まる」)
- 発語内の力は、明示的遂行動詞によって明示される

## 今日話さないこと

- 二つの主張の論理的関係については、機会を改めて論ずる
- それぞれの主張を構成する信念の相互関係についても機会を改めて論ずる
- 文の意味論がなぜこまったものであるかということについては、論じない
- そもそも言語哲学とは何かといったようなことも論じない
- 本当に面白いこと(たとえば形式意味論のような)ことも論じない
- 日本語なんてどこにあるのという話もしない
- 音韻論以上は欺瞞であるということ(ハードディスクの発達)についても論じない

## • 文中心主義の誤謬

- 語の再現可能性(「これはこれではない」)
- 挨拶、謝罪、約束の「意味」 無意味な文
- 文の集合は決定可能である
- そもそも「文」は使われない
- 音と字がすべて

## • 自律的意味論の誤謬

- コンテキスト・状況が意味を決定するのか(「文」も「断片」も同様)？
- 語の意味、構造の「意味」？
- 発語内の力は「文の意味」から導かれるか？

## 代替案

- コミュニケーションはコミュニケーションがないときが最適である(共通時計・共通計画等)
- 最適でないコミュニケーションのために言語が存在する。したがって、(コミュニケーションという観点からは、)言語は補助手段である
- 言語が体系的であるという信念からの自由
- 最適の状態では、状況における課題遂行がすべてである
- 言語はその不足を補う(名詞は、ものを補うなど)
- 言語以外のものも補う(視線は話しかけている相手を決めるなど)
- 言語は歴史的生成物である(制度化、語彙化、文法化)
- (Armchair linguistは言語を研究していないに等しい)

- 対話とその管理に関する一般理論
  - 相槌、フィラー、沈黙、視線など
  - 照応(代名詞と名詞の繰り返しなど)
  - 「断片的」発話の意味論
  - 計画と会話
- 外国語教育
  - サバイバル外国語こそ真の外国語
  - 文法的に正しい外国語を使うことはたんなる権力的行為
  - NHKの外国語講座こそが正しい姿